

井伏鱒二「黒い雨」の位置：「体験の継承」という役割について

内田，友子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494442>

出版情報：比較社会文化研究. 3, pp.1-9, 1998-02. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



井伏鱒二「黒い雨」の位置

——「体験の継承」という役割について——

内田 友子

はじめに

水田九八二郎『原爆文献を読む——原爆関係書2176冊¹⁾』では、「黒い雨」は次のように紹介されている（傍線内田）。

原爆文学の代表的作品として原民喜の『夏の花』（別項改題）（本書注。以下同じ―注内田）、大田洋子『屍の街』（別項改題）、井伏鱒二の『黒い雨』が挙げられる。

自ら被爆体験を経たことから、昭和二十年九月以来「被爆者としての使命感とでもいったものに駆り立てられ」、「憑かれたように」二千冊以上の原爆文献を収集したという水田が、原や大田と並べたところで「黒い雨」を「代表的」だと称する。また、「黒い雨」から十年後の昭和五十年に「祭りの場」で芥川賞を受賞した林京子は、作品を執筆するにあたって事前に読んだ「原爆文学」は「黒い雨」だけだったという²⁾。

なぜ「黒い雨」はこのように「代表的」な原爆文学に位置付けられるのか。

井伏鱒二「黒い雨」の位置（内田 友子）

被爆体験者から書きはじめられたいわゆる「原爆文学」は、たとえば大田洋子が「いつかは書かなくてはならないね。これを見た作家の責任だもの。」（『屍の街³⁾』と語ったように、あるいは原民喜が「このことを書きのこさねばならない、と、私は心に呟いた。」（『夏の花¹⁾』と書いたように、その目的は明確であった。自らの被爆体験を後世に伝える、ということである。

しかし井伏は、被爆体験を持たない。その作家が描いた「原爆」についての作品が、賛否含め、なぜ注目を集めたのか。教科書にとりあげられたことも手伝ってか「黒い雨」は井伏文学のなかにおいても代表作という扱いで定着している。しかし井伏がこの他「原爆」に関して書いた小説は「かきつばた」（『中央公論』文芸特集一九五一年六月号）一作のみで、むしろ題材という点から井伏文学全体を概観したときは異彩を放つ部類だといえる。また構成上の破綻も指摘されており、完成度の点では疑問が残る。にもかかわらずこの「黒い雨」の位置付けはどこからくるのか。

本稿では、この「原爆文学」の代表格に「黒い雨」が位置付けられる理由について、今日の「語り部」たちが抱える問題を基軸にしながら考察してみたい。

なお本稿における引用文中、傍線はすべて引用者によるものであり、漢字の旧字体は新字体に改めている。

一、「体験の継承」という問題

日本では毎年八月が訪れるたびに広島・長崎の平和式典が繰り返され、新聞や雑誌、テレビで関連の特集が組まれる。次に挙げるのは、一九九七年の「朝日新聞」の特集である。特集タイトルは「語り部」の向こう側――長崎・広島・沖縄」。連載第一回目（八月三日）は六十五歳の渡辺司さんの体験を紹介している。渡辺さんは長崎市の外郭団体、長崎平和推進協会の「継承部会」に登録しており、一時間余りの一人芝居で被爆体験を若い世代に伝える「語り部」である。同年六月にも、修学旅行中の中学三年生二百十二人を前に上演した。その時の生徒の反応である。

いつもと雰囲気違った。大声で話す。背もたれに足を乗せる。座席や通路に寝転ぶ。ナレーター役を務めていた妻の妙子さん（六二）が話し始めると、前に座っていた数人が「おばちゃん」と手を振っ

た。ナレーションの合間には「ほんまに」と合いの手が入る。

妙子さんは戸惑った。生徒の顔を見つめるようにして話すと、「あのおはん、にらんだで」とちやかされた。その後も、舞台が暗転するたびに、やじが繰り返された。「はよ終われ」「はいおしまい」「またじじいが出て来た」……。

「原子爆弾がもたらしたむごくて悲しい事実は、決して歴史の間に葬り去ってはならん」とはい。司さんがそう語ったとき、妙子さんの腹部に小さな「何か」がぶつかった。一瞬、息が詰まった。そばに、親指の先ほどの大きさのうす緑色のキャンデーが一粒落ちていた。拾った時、ぐにやっとした、いやな感触が指に残った。司さんは悔し涙が止まらなかった。

他の語り部たちからも、「語り部を無視してしゃべり続ける生徒がいる」「先生が眠っていたことさえある」等の報告があるという。

また翌日の連載第二回目（八月四日）では、一九九〇年十一月、「校外実習」で沖縄に出かけた東京の大学生たちと、一行の案内役をつとめた沖縄の大学生の間で交わされた論争の様相を紹介している。沖縄本島の南部戦跡を巡ったり資料館を訪れたりした東京の学生たちは、後日、実習期間中に自分たちで回し読みするために書いた「日記」を、実習報告書の中に盛り込んで沖縄へ送った。それは、実習で感じた「戸惑い」を素直に伝えるためであった。日記には、語り部から話を聞いたときの印象について、「不謹慎なことを言わせてもらえば（語り部は）『酔ってる』かもしれないと思った」と書いていた。ガイド役を引き受けた学生や沖縄戦体験者らは当然のことながら憤り、反発した。

「沖縄戦体験者を侮辱している」としか思えない表現などが際立っている」

「体験者は口を閉ざしていた。本来なら語りたくない戦場の光景を『語らねば』という思いにかられて口を開いた。その姿に接した時、『酔っているかもしれない』とは思わない」

今度は明学大の学生が衝撃を受ける番だった。九月、再反論も含む四十五ページの文集を作り、再び沖縄に送った。

「皆さんの感想文を読んでいると、暗黙のうちに私たちの感想（の一部）に対して『これは戦跡巡りの感想としては認められない』と言っているように感じる」。伝える側が予期していたような受け止め方を、伝えられる側がしなかった場合、双方はそれぞれどう向き合うべきか――。戦争体験の継承に絡む本質的な問題が、図らずも問われた。

これらの記事は対象こそ異なるが同じ問題をはらんでいる。終戦からすでに半世紀以上経った今の日本社会において、原爆や戦争といった「体験」の存在感が希薄になりつつある傾向は明らかである。そして、「伝える側」の予期する反応を、「伝えられる側」は拒んでいるのである。

では、文学作品として「原爆」が扱われる場合には、同じ問題にぶつからないだろうか。原爆を題材とした文学が原爆文学と呼ばれ、戦後さまざまな形の原爆文学が登場してきた。しかしそれと並行して、「語り部」たちがスタイル再考の必要を感じ始めたように、文学の場においてはそもそも「文学」という方法が選択されたということ自体に対する論議が、たとえば五〇年代・六〇年代に「中国新聞」紙上で起こったいわゆる原爆文学論争に

もみられるように、繰り返されてきた。それは、「文学」そのものの位置付けにも関係してくることであり、言い換えれば、「文学」をどう位置付けるかによって、議論の立脚点がまるでそろわなくなってしまう話である。

文学作品において、体験のない者が「原爆」を題材とするとき、そこでの手法にどのような可能性があるのか。つまり、非「体験者」による「原爆文学」とは、どのようなものなのか。ここでは「黒い雨」について、その手法を検討する。

二、井伏鱒二「黒い雨」の評価をめぐって

まず、この作品は発表された当初から各紙の文芸時評でとりあげられ好評を博するという好調な滑り出しをみせた。

山本健吉は、評価の焦点を当時の原水爆禁止運動団体の分裂騒ぎと関連づけ、また、「黒い雨」をもって今後の「原爆文学」の嚆矢とする見解を示した。

井伏氏は、原や大田のような、原爆の経験者でない。だが、あのとときの記録も、なまなましい体験記の時代を過ぎて、いろいろの記録、証言を総合した立体的な記録として書かれる必要がある。その総合のための方法として、小説という形の自由さは、恰好である。（略）

原爆を描いて、しかもあらゆる政治的俗念から自由であり、そのことが、しばしば書き古されたことを書きながら、しかも新たな感じをいだかせる。貴重な記録的作品である。

また、当時の平和運動の様相を踏まえた意見は平野謙からも次のように出された。

しかし、私一個としては「終戦」から二十一年たった今日、こういう長編が井伏鱒二のような作家によって書かれたという事実を、まず注目したいのである。ということは、原水協と原水禁と核禁会議という三つの団体に運動が分裂し、ことしの世界大会にはまた脱退さわぎまで起こったというような政治的イデオロギー的な現状に対して「黒い雨」は大きな無言の警告を発している、と思えるからである。

さらに江藤淳による評は、「黒い雨」評価の代表的言辭としてその後度々引用されることになる。

「黒い雨」はひと言で言えば原爆をあつかった小説である。私はもともと原爆小説というものが好きではない。それどころか原爆のことを書いたり話したりするのもはばかりたいような気持ちである。原民喜の『夏の花』や大田洋子の一連の作品を読んだときもそう思った。(略)

これは結局体験と表現との落差がはなはだしすぎて、大概の文学的表現を嘘にしまったためにちがいない。それに私は、原爆を「知識人」的慣用句でとりあつかうことに軽薄さを感じた。

しかし「黒い雨」にはそういう空疎さが少しもない。(略)「黒い雨」の動かしがたい説得力の秘密は、二十一年前の広島におこった異常事を語るにあたって、作者が見事にこの平常心をつらぬき通しているところにある。

この他に佐伯彰一も「圧倒的な反日常的事実に対して、まことに控え目な、記録者の位置にみずから置く」として、井伏の手法の成功を述べた。

このように、発表当初「黒い雨」は称賛を集めた。し

井伏鱒二「黒い雨」の位置(内田 友子)

かしこれらの評価をみると、まず、当時の原水爆禁止運動団体の分裂騒ぎを非難する目的で「黒い雨」を持ち出してはいないか、また、それまでの「原爆文学」を批判する目的でこの作品の手法に評価が集まっているのではないか、という傾向がみられる。そのため、この最初の「好評」はのちに反論を呼ぶ。

たとえば大江健三郎は江藤が使った「平常心」という表現を次のように解釈して批判を加えた。

原爆投下とそのままらしたものを見定める平常心が、井伏鱒二の作家としての永い修練にかかっている、とかれがいう以上、この平常心とは、広島の外から傍観者として、被爆体験を見きわめようとする作家の平常心、傍観者の平常心と解釈すべきであろう。

原爆のような異常事すら、井伏鱒二の作家としての修練によってかちとられた、傍観者の平常心によれば、それを明瞭にとらえられて古典的な文学の世界に近づくことができる。この文学をつうじれば、読者も、自分の傍観者としての平常心をそこなうことなく、原爆に、相対することができると。こうした着想が、江藤淳がその意識的な典型たらんとしている日本文壇の保守的な側面を安心させたのである。

また長岡弘芳は、これらの文芸時評が「黒い雨」以前に書かれた他の原爆関連の文学作品についてはまったく触れずに「黒い雨」だけを持ち上げている、ということを指摘し、次のように述べた。

(略)山本らの評価はそれ自体が政治的にイデオロギッシュであるばかりでなく、『原爆』もまた既成文壇的な枠組——心境小説風な伝統のなかに収ま

れば手離しでほめてみせるという、戦後もひきつづく日本文化の風潮の一端をまかいま見せてくれたのである。

長岡の批判には、「黒い雨」のどのような面が「心境小説風な伝統のなかに」おさまっているのかという点の具体的な指摘がないが、大江の意見と比較してみるとその指すところはやはり「黒い雨」評価の「平常心」という表現であろうか。

以上、「黒い雨」発表後の評価に対する意見をいくつか挙げてきたが、この大江、長岡が批判しているのは「黒い雨」評価の言説に対してであり、決して作品「黒い雨」自体に対するものではないことを確認しておきたい。むしろ、大江は「おなじく平常心という言葉を用いるなら、原爆を現実自分の頭上にうけた被害者の、しかもなお最悪の日常を生きのびようとする人間の平常心によって緊張している」ことを井伏は描いているのだといい、また長岡には「たぶん一人の文学的天才よりは、多くの人間の誠実さの継続する多様な個性的営為こそが、原爆文学にあつてはとりわけ必要なのだと、「黒い雨」はまずそのことを教えているように思われる」という意見がある。

発表当時の「黒い雨」に対する評価に平和大会を引き合いにする意見が多かったところから長岡の反論は出ているが、「黒い雨」のなかには次のような箇所がある。

「もう池本屋も、広島や長崎が原爆されたことを忘れとる。みんなが忘れとる。あのときの焦熱地獄——あれを忘れて、何がこのごろ、あの原爆記念の大会じゃ。あのお祭騒ぎが、わしゃあ情ない」

(「黒い雨」—2)

この箇所について金子博は、「黒い雨」の作品内現在が昭和二十五年頃であることから、実際に大会が「お祭騒ぎ」化するのとはもつと後のことではないかという考察を提出している¹³。その上で金子は、作品を準備している段階の井伏の平和大会批判が登場人物のせりふとなつて現われていると述べる。この指摘からも、作品発表当時山本健吉や平野謙が平和大会批判との関連性を強調したことは、イデオロギッシュ云々を離れても強引な解釈とはいえないであろう。また、江藤淳が用いた「平常心」ということばに対して大江は、傍観者の平常心によつて被爆体験を文学的感銘に昇華させることができるならそれは気楽な話だと反発している。しかし、それが作家の、あるいは被爆者の努力の上に成り立つ「平常心」であるという主張は、結局江藤の意見と同じ方向にあり、格別反論になつていとも思われない。これらの論は今日からみると、発言者たちの立場が色濃く強調されているばかりで、言説自体に矛盾はないとしても果たして「黒い雨」というひとつの作品に確実に降りていく論なのかどうか、疑問が残る。

以上、「黒い雨」の評価をめぐっていくつか論を挙げてきた。しかし論争とまではいかないまでも、この「黒い雨」の位置付けをめぐる諸意見は、実はどれもある共通性を持つていえるのではないだろうか。つまりそれは、作品「黒い雨」について語り合おうとしながら論は作品を通り越し、最終的には「原爆」を文学で扱う場合にはどうすべきかという問題を主張をしあう形になつていて、ということである。では、作品に即した意見は、たとえば井伏本人からどのような出されているのか。

三、「原爆を語る者」を描く

——井伏鱒二の手法——

「黒い雨」発表後、井伏本人からの当初の「好評」

を返上するような発言が続いた¹⁴。これは「黒い雨」の成立事情に関わる。主人公重松のモデルである重松静馬氏の手記、作品中実名で登場する岩竹博氏の手記、その他実在するいくつかの記録から作品が成っていることが繰り返された。

あれはルポルタージュです。あんな前例のないことは、空想では書けないもの。僕の書いていることは、あの出来事のうちのほんの一部分ですね。体験者の一人一人が、あのことを、各自、別な目で見てゐるんだ。だから、まとまった記録をつくるなら、大勢の作家が、大勢の人から素材をもらつて書いて、それを合本にするといひね。僕のは、おもに三人くらの人が見た世界だから。あれを体験した人や、あの地元の人は、あれでは物足りないんだ。もつともつと、物凄なものだ。

（神保光太郎との対談『「黒い雨」その他』¹⁵）
一九六九年七月

「いいことかわるいことか知れんが、書いてる途中で、まじめになつちやつた。ぼくは二ヒリズムが売り物だったが、この小説の中では、実際の記録を残そうと思つた。重松さんの手記には多少の手は加えたが、岩竹さんの手記は一字も変えていない。被爆者の話を聞くとときも、国会の速記の人を頼んで連れていった」

（『朝日新聞夕刊』一九八三年七月二十二日）

この作品は小説ではなくてドキュメントである。閑間重松の被爆日記、閑間夫人の戦時中の食糧雑記、並びに岩竹博医師の被爆日記、岩竹夫人の看護日記、複数被爆者の体験談、家屋疎開勤労奉仕隊数人の体

験談、及び各人の解説によつて書いた。熊手をもつて掻き集めるやうにして書いた。空前の出来事であり二度と繰返してはならないことだから、もつと広い範囲にわたつて、もつと大勢の者で手分けして記録すべきではないかと思ふ。

（『覚え書』一九八六年（月未詳）¹⁶）

これらの発言は、一貫して井伏が「黒い雨」における独創を否定する形になつてゐる。

近年、「黒い雨」の主人公閑間重松（重松静馬）の被爆日記を所有する豊田清史が、『「黒い雨」と「重松日記」』（風媒社、一九九三年八月）で両書の内容を比較し、「黒い雨」を傑作だとする従来の評価に異議を唱えた。その理由として、「第一にこの作品には、日記や資料が生そのままに多く使われていること。第二に小説ならずともストーリーが確かでないこと、第三に気分的で原爆の深刻な実感がよく描かれているとは思えないからである。」等々、両書から例文を挙げながら報告している。これに対して東郷克美は、「これは文学テキストというものの性格を無視し、モデルと作中人物を同一視している点で意図が別にあるのならともかく文学論としては論外である。」として、次のように反論している。

仮りに「黒い雨」がその素材の「六割」を重松静馬の日記によつていとしても（右の書『「黒い雨」と「重松日記」』一注内田）を読むかぎりそのようなことはありえないが、それはあくまでも素材であつて、作家の構想に従つてそれが引用され、そのエクリチュールの中にとりいれられるとき、たとえ同じ事実でも意味内容が變つて自立した別次元の言語になるはずである¹⁷。

先に挙げた自己解説からも、井伏本人が「黒い雨」を「ルポルタージュ」や「ドキュメント」として位置付けているので、豊田の報告は井伏の発言に乗じた形のものだといえる。しかし、「黒い雨」がなぜ今日「代表的」な原爆文学として位置付けられているのかという問題を顧みた場合、そこには緻密な取材による記録や資料の豊富さが理由のひとつに数えられているであろう。なぜなら作者の井伏には被爆体験がない。豊田が「生のままで余りに多く使われている」としてもそれは言ってみれば自明であり、問題は東郷がいうように、それをいかに構想するかという点にある。またそのことが、今後の「原爆文学」におけるひとつ重要な問題でもある。

文学作品で「原爆」が扱われるとき、特に原爆投下から半世紀以上の歳月が過ぎた現実問題として体験者が減り、現在進行している社会問題におかれ「原爆」の存在感が薄れている状況において「原爆」が語られるとき、「屍の街」や「夏の花」をもう一度持ち出したとしても不十分であろう。記録としては価値があるかもしれない。しかし現在、「原爆」を通して語られるものは、「語り部」が抱える問題をみても、すでに半世紀前と同じものではないのである。そこに現われた「黒い雨」は、文学作品で「原爆」を扱う場合に持ち上がる不満や不安をうまく回収していく作品であったといえる。

その理由には、被爆体験を持たない作者が「原爆」にむきあっていること、そして膨大な実在資料を作品に組み込んだことがまず挙げられる。これは、「体験の継承」という問題を文学作品においてすくいあげる可能性を示したといえる。さらに、「黒い雨」がほとんど政治的な発言とは無関係な立場にいる作家によって書かれた、ということも注目を集めた要因としてやはり見過ごせない。その「黒い雨」の中ではつきりと示される「戦争反対」の言説は、当時の平和運動をめぐる騒ぎが背景とし

井伏鱒二「黒い雨」の位置（内田 友子）

てある場合、むしろ実際以上の説得力を発揮したのではないだろうか。

たとえば、井伏自身の解説にもそれはうかがえる。

「川のほとりで、群衆の一人がキノコ雲を見て、叫ぶでしょう。あれは、ぼくが叫びました。実際には、だれも叫ばなかったらう。僕が叫びたかったのは、あれですよ。あのへんを書くあたりから、そろそろまじめになった」

（『朝日新聞』一九八三年七月二十二日）

作品では次の部分を指す。

たいていの人はクラゲ雲から目をそむけていた。草の堤に仰向けに伸びている怪我人も少くない。例外としては、ただ一人、両手をクラゲ雲の方に突きだして「おおい、ムクリコクリの雲、もう往んでくれえ、わしらあ非戦闘員じゃあ。おおい、もう往んでくれえ」と繰返して金切声を張りあげる女がいた。元氣そうにしているにもかかわらず、橋を渡ろうとしないのが妙なものであった。〔略〕はたの者はその女を振向いても見なかった。

（『黒い雨』―3）

この他、先に挙げた神保光太郎との対談のなかでも「あれは、ベトナム戦がさかんころ、戦争反対の気持も含めて書いたのだが、戦争推進者にたいして全然無力です。」という発言もみられるし、「黒い雨」の中の戦争批判の言説はすでに多く指摘されている。井伏の、「黒い雨」における独創性を否定するかのような発言の一方で、作品執筆の目的はつきりと語られている。

昭和四十年代当時において（今日においても通用する

が）、昭和二十年の「原爆」から立ち上がる目下の問題としての「戦争反対」、このような奥行のある構図を示すことが「黒い雨」の目的のひとつだといえるのではないだろうか。つまりこれは、時代を越えることができない草分け的「原爆文学」の後をどのように引き継ぐか、という問題をすくいあげている。

今日のように戦争体験のない者が作品発表の場に存在することを視野におさめながら、そこでどのようにして「戦争批判」の言説を出していくか。さらには、被爆体験のない作家が「原爆」を扱うとき、どこに「戦争批判」を結びつけていくのか。

これらの問題に対して「黒い雨」は、実在の資料の作品化、という手法で対応しているわけだが、それは「原爆」を語っているのではなく、「原爆を語る者」を描く、という構造になっている。大江は、井伏について「被害者の平常心を表現することをつづけてきた作家である」といつている。つまり、被爆体験のない井伏はこの作品の中で「原爆」を表現しようとしているのではなく、「原爆」を体験しそれを語る、あるいは表現する者たちの姿を描いている、といえる。

作品では重松の日記清書という作業の中か資料という形でしかヒロシマは登場してこない。井伏が描いているのは「原爆」を表現しようとする者であり、それが、姪の結婚に悩み日記の清書を思い立ち「原爆病」を抱える戦後の重松の姿である。

たとえば大田洋子は「原爆を体験した者」であると同時に「原爆を表現する者」でもあった。井伏はこれと異なり、「原爆を表現する者」を描く側にいるのである。言ってみれば、「黒い雨」は「原爆」を描こうとした作品ではないのである。

四、「原爆文学」は画一化されるのか

「黒い雨」は「原爆」を描いていない、といえは誤解を招くかもしれないが、確かに当時のヒロシマを今日そのままに描きだすことは、文章であれ何であれ不可能である。この論考のはじめに、「原爆」と「文学」、という二つの事象を結びつけることには問題がともなうことを述べたが、「原爆」を文章で表現し尽くすことはできない。これは問題がとくに「原爆」でなくとも自明であるだろう。それゆえに、「原爆文学」といわれるものが描けるのは「原爆」そのものではなくて、「原爆」から立ち上がり今日へと波及してくる様々な問題だということができる。

そのひとつとして、黒古一夫はどうすれば〈反核〉を意識の深いところでもとらえることができるか、という問題を基軸にして「原爆文学」の可能性を次のように述べている。

視覚に訴える絵画や映像、写真もそれなりの芸術的特性を生かして〈反核〉意識の形成に役立ってきたと思うが、長時間の思考と想像力の駆使を要求される〈言葉〉による芸術＝原爆文学を経験することこそ、何よりも〈反核〉を身体化する確実な方法なのである。

（『原爆文学論——核時代と想像力——』²¹）

一九七七年の「新日本文学」評論部門で受賞した論文「戦後・ある呪詛と怒りの構造——大田洋子の場合——」²¹では、大田洋子の作品の掘りおこしをはかりながらも一方で「小説として原爆を扱う以上、作者自らの思想を点検し、時々刻々と変化する情勢に十分対応できる思想を形成しなければ、感情的な反撥だけでは原爆の持つ意味

を総体として把握することができなくなってしまう」と大田の作品の弱点を指摘し、黒古は一貫して「原爆文学」が存在する意味を主張してきている。それが現代の〈反核〉というひとつの問題へと結び付けられてきたわけだが、その反面で、問題意識への固執が「原爆文学」を画一化させてしまうのではないか、という危惧が残る。

『原爆文学論』（前掲）では「黒い雨」について、「いわれなき〈被爆者差別〉を黙って受け入れてしまう庶民の姿を、〈叫び〉を抹殺したところで描きだしているために、〈被爆者差別〉の現実を放置してしまっている」と指摘した上で、次のように批判している。

そして、この原爆文学の「名作」と言われる『黒い雨』の最大の問題点は、原爆（被爆）を〈被害〉

の観点でしか描いていないことである。確かに、広島（長崎も同じ）で被爆した人々は「無辜の民」と言つてよい人たちで、〈戦争＝被爆〉を、またその後の〈被爆者差別〉もそのまま受け入れるしかなかったかもしれない。しかし、広島、長崎が爆撃目標として選ばれた理由は、効果を最大限にあげるための地形的特徴を備えていたことと同時に、両市が重要な戦略地域であったことも理由の一つであったこと、つまり十五年戦争（太平洋戦争）に深くかかわっていた都市であったことを抜きにして〈被爆〉は考えられないということである。（略）もちろん、個々の被爆者すべてに〈戦争＝加害〉を考えるべきだ、というわけではない。被害者個々は、自分の体験した被爆の事実について大いに語る権利があるし、この核時代にあつてはもともとと声を大にして〈体験〉を公にすべきである。そこには〈事実〉が持つ重みがあるからである。

しかし、直接的な〈体験〉を持たぬ者が〈原爆（被

爆〉）に向き合う場合は、そこには自ら被爆をめぐる歴史的・社会的視点が要求されるべきだろう。つまり、〈被害〉の側面だけでなく、〈戦争〉が人々に強い〈加害者性〉に対する視向がそこにはないかぎり、「戦争はいやだ、原爆は悲惨だ」程度の心情は組織し得ても、〈反戦〉や〈反核〉の思想は組織し得ないのではないか、ということである。²²

「原爆文学」における黒古の問題意識が〈反核〉に据えられているため、「黒い雨」もその見地から論じられている。しかし、「思考」や「思想」にもとづいて「原爆文学」が書かれていく、という必要性がかりにあるにしても、ここでは逆の動きがみられないだろうか。つまり、ここで挙げられている〈被害〉（加害者性）といった言説が作品「黒い雨」を特定の思想へと強引に引き寄せていないか、ということである。「黒い雨」は発表当時の平和運動等社会的背景との相関関係で、評価の焦点が作品を通り越したところに当てられるという状況に置かれたが、その時の状況から今日まで、この黒古の「黒い雨」評を見るかぎりでは「原爆文学」評価の足場は一向に拡がっていないのではないだろうか。

たしかに「黒い雨」には「戦争批判」の言説が多く含まれ、井伏の解説からもそれは作品にたくされた「思想」だと読み解いて異論はないであろう。しかし、それを作品の主調音として定めていいかどうか、という問題はまだ検討を重ねる必要がある。

たとえば、「黒い雨」の最終章には次のような場面がある。一九四五年八月十五日、「重大放送」の後、ラジオのある食堂へむかった重松は、「工員たちが今まで一度も見せたこともないような険しい表情をして次から次に通りすぎ」るのにであう。なかには泣いているものや、顔を覆っている女子工員もいる。

〔略〕寄宿舎に帰る数人づれの女子工員のうち、泣いている一人の肩に連れの一人が手を置いて、

「あんた、泣かんと置き。これでもう空襲はないけんな」と慰めていた。

僕の目にも涙が込みあげて来た。〔略〕僕の涙はもう引込んでいたが、正直なところ、それは今月今日正午すぎの涙として正統派に属するものであったとは云われまい。僕は幼いとき近所で遊んでいて、要市という背の高い半ば白痴の無法者によくいじめられた。それでも、その場で泣くのは我慢して家に逃げ帰り、お袋にねだつて拭けた胸元から出してもらった乳房を見ると同時に泣きだすのであった。いまだに乳の味が鹹^{しほ}つばかったのを覚えている。ほつとした瞬間の涙であるが、今日の涙もそれと同じ種類のものではなかったかと思う。

〔黒い雨〕―20〕

重松にとつて、玉音放送の後でなによりもまず心を占めた感情は「ほつとした」であった。これは「原爆」による様々な惨状を目撃してきた人間が等しく抱いた感情とはいえない。たとえば大田洋子が終戦直後、まだプレスコードの統制を受ける前の「朝日新聞」（一九四五年八月三十日）に書いた次のような文と比較しても、その反応のちがいは明らかである。

広島市が一瞬の間にかき消え燃えただれて無に落ちた時から私は好戦的になつた。かならずしも好きではなかつた戦争を、六日のあの日から、どうしても続けなくてはならないと思つた。やめてはならぬと思つた。戦ひの推移を、父の友人の医者の家で、傷の手当をうけながらきいた。私は両手でお腹を抑へ床にしがみ込んで、ぼろぼろと涙を流した。あ

井伏鱒二「黒い雨」の位置（内田 友子）

の劇烈な原子爆弾からうけた衝動にくらぶべくもないほどの劇しい驚きであつた。

ここで、「黒い雨」に描かれる重松を単なるストーリー・テラーとして扱うのではなく、その人物像をもつと掘り下げる必要がある。「黒い雨」は「原爆」を題材とした作品であることから、何は置いてもまずそのモチーフは「原爆」にある、という見方がいわば無条件に定まつてしまっている。そのため、「原爆」から立ち上がる問題意識としたたとえば黒古のように〔反核〕を念頭においている場合、「黒い雨」に描かれた他の部分はその批評の視野からもれている。つまり重松の人物像に焦点をあてて「黒い雨」を読んだ場合、そこに「被爆をめぐる歴史的・社会的視点」や「戦争」が人々に強いた「加害者性」というモチーフを盛り込むべきだとする主張は、はたして作品へ忠実に立ち戻ることができる批評なのか、という問題である。

作品へ戻ることのできない批評は、言わば「原爆文学」の画一化を標榜しているといえる。しかし、「原爆」を題材としてとりあげた文学作品がすべて一様のモチーフである必要があるだろうか。それは「語り部」が、「伝える側」として「伝えられる側」に一様の反応を期待する構図に通底していないだろうか。

「黒い雨」のなかで、重松はどのように描かれているか。いくつか挙げてみたい。

（兵隊が戸板に死体を乗せて次々と運び、大きな穴の中に放りこんで焼きながら「わしらは、国家のない国に生まれたかったのう」と言葉を交わしあう場面。―注内田）

しくしく胃のあたりが差込んで、だから僕は灰土が厚く溜っているのかまわらず石段に腰を卸した。

蕎麦粉のようにさらさらしている土なので、指先で触っているうちに渦や文字が書けた。いろんなものが書けた。僕は学校の黒板を思い出し、幾何学のピタゴラスの定理の図を書きかけたが書けなかった。

〔黒い雨〕―12〕

僕は今の会社に勤める前、〔略〕七年間ほど陸軍糧秣廠に勤めていた。弁当を持って徒歩で通つたので、旭町と翠町の境の広い稲田や蓮田には馴染みがある。毎日、通勤する途中に得た景品は、朝露に濡れた稲田の畦に舞い降りている鳥を見ることがあつた。〔略〕僕の郷里では「朝鳥はまんがよい」と云っている。朝鳥を見たものは、その日は運が悪くないという意味だ。動植物の色彩の調和美を謳歌しているのではなかったか。僕は勤めはじめのころ、糧秣廠の図書館で「まんがよい」の「まん」というのを調べてみた。「まん」は「間」の転化で、「運」めぐりあわせ「しあわせ」である。

それにつけても広島市の町は極めて「まん」が悪かつた。蓮田のなかにまで死骸がころがっていた。

〔黒い雨〕―12〕

焼跡の様子は昨日とあまり変わらない。そこかしこにいる骨探しの人たちが、お尻を立てて前かがみになつていたりかと思つと不意に腰をのびし、また前かがみになったりして潮干狩の光景を思わせた。

〔黒い雨〕―13〕

このように重松の言動には、「原爆」に直面したことがかえって日常生活での印象が頻繁によみがえるという傾向が目立つ。「黒い雨」で使われる文体や表現に対し、現場の深刻さにそぐわないとする指摘は、このような箇

所からきているものであろう。

しかし先にも述べたように、「黒い雨」が「原爆」を描いたのではなく「原爆を表現する（語る）者」を描いた作品だとすれば、一個人である重松に焦点を絞った場合、そこに見えてくるものは、「日常生活」が通用しない世界に放り出されたことで、言わば現場の深刻さに追いつく余裕のない人間の思考状態だといえるのではないか。

八月六日の前日までは広島町のなかに戦時中とはいえ生活があった。そして「原爆」によって広島町は一変するが、「日常生活」は生きている重松の内側にとり残された形となり、原爆投下後の町の情景とはおよそ釣り合いの感概となつてあらわれる。「黒い雨」で描かれる重松はこのような状況に置かれているのではないだろうか。

重松の「生活」への執着は、次のようにも述べられている。

重松は引きつづき「被爆日記」を清書した。

今月は芒種と虫供養がすんで、十一日にはお田植祭、十四日には旧の菖蒲の節句、十五日には河童祭、二十日には竹伐祭と祭が続く。この貧相な幾つものお祭は、昔の百姓たちが貧しいながらも生活を大事にしていたことの象徴のようなものである。重松は清書を続けながら、あの阿鼻叫喚の巷を思い出すにつけ、百姓たちのお祭が貧弱であればあるほど、我れ人ともに、いとおしむべきものだという気持ちになっていた。

（「黒い雨」―7）

このように、「黒い雨」での戦争批判の言説は日常生活への執着という関係性から引き出されており、それは

一個人のレベルまで降りていつて、もつとも切実なところで描かれているといえる。先に、「黒い雨」が原爆文学の「代表的作品」に位置付けられている理由として考えられる点をいくつか挙げたが、それに加え、この作品にたとえ実在資料が多く使われているとしてもそれによつて「原爆」そのものを伝えようとするのではなく、その資料となつている日記や手記を書かなければ、と迫られた人々の切実さを描いている点が挙げられるのではないだろうか。しかも重松は「しかし、自分で見たことの千分の一も本当のことが書けとらん。文章というものは難しいもんじゃ」（「黒い雨」―4）と嘆いており、「黒い雨」では作品の始めから文章によつて「原爆」そのものを描くことへの限界性が示されている。「原爆」そのものよりも「原爆を表現する者」を描き、「日常生活」の喪失というもつとも根本的な個の問題を描くことが、「黒い雨」の主調音だといえる。

おわりに

この「黒い雨」に、つまり「重大放送」に何よりもまず「ほつとした」という重松の人物像に、果たして「被爆をめぐる歴史的・社会的視点」、「戦争」が人々に強いた（加害者性）といった今日のパブリックなモチーフを盛り込む接点はあるだろうか。もし、このようなモチーフの作品でなければ「原爆文学」とは言い得ないといふのであれば、「黒い雨」は当然「原爆文学」ではない、ということになる。

「原爆」という題材を扱うと、作品内の言説を通り越したところで作品が評価される。この傾向は、「原爆文学」といわれる作品群の足場を非常に狭めているのではないだろうか。たとえば黒古が主張するような、〈反核〉を念頭に置いた「原爆文学」の存在は重要だが、「原爆

文学」は今後多様化していく必要がある。それは、「体験の継承」の問題ともかわつてくる。つまり、伝える側が予期するおりの受けとめ方を伝えられる側ができなくなっている、という現状から起こる「伝えられる側」の拒絶反応の問題を、文学の場においても考える必要はないだろうか。このような現状を踏まえると、「原爆」という題材だけであるひとつの画一化された型におさめられたものが今後「原爆文学」の流れを引き継いでいくのかどうか、疑問が残る。

大江健三郎は原爆を、「大規模な民衆によつて共有される「経験」と表現し、次のように述べている。

そしてまた自分が現実に原爆を体験したのではないが、ともに核時代に生きる人間であることにはかわりのない様ざまな場所の、様ざまな年齢の日本人が、それぞれのきつかけを把握し、それを深めてゆき、あの時刻、あの場所にむかつてゆく、その仕方はそもその最初から多様である。

註

- （1）水田九八二郎『原爆文献を読む―原爆関係書2176冊』（中公文庫、一九九七年七月）二、九頁。「」の引用は「あとがき」より。
- （2）（対談）林京子・野呂邦暢「昭和二〇年八月九日―芥川賞受賞作「祭りの場」をめぐる」（『文学界』一九七五年九月号）の中で発言。
- （3）引用は『大田洋子集第一巻』（三一書房、一九八二年七月）七三頁より。
- （4）引用は『完本原民喜全集I』（青土社、一九七八年八月）五一―四頁より。

- (5) 「原爆文学論争」は中国新聞紙上で一九五三年と一九六〇年の二度、起こっている。現在、『日本の原爆文学』⑤ 評論／エッセイ（ほるぶ出版、一九八三年九月）でその抄が紹介されている。またそれ以前にも栗原貞子の『核・天皇・被爆者』（三一書房、一九七八年七月）では論争の展開を抜粋とともに追っており、その概要を確認できる。
- (6) 山本健吉「文芸時評（上）」（『読売新聞夕刊』一九六六年八月二十九日）。
- (7) 平野謙「九月の小説（上）」（『毎日新聞夕刊』一九六六年八月三十一日）。
- (8) 江藤淳「文芸時評（上）」（『朝日新聞夕刊』一九六六年八月二十五日）。
- (9) 佐伯彰「小説家と記録者」（『朝日新聞夕刊』一九六六年十二月八日）。
- (10) 大江健三郎「井伏鱒二と日本文壇の「原爆」概念」（『持続する志』三九四頁。文芸春秋、一九六八年十月）。初出未詳。
- (11) 長岡弘芳「原爆文学と戦後史―ナシヨナリズムに沿って―」（『歴史学研究』No.457、一九七八年六月号）。
- (12) 長岡弘芳『原爆文学史』（風媒社、一九七三年六月）八〇頁。
- (13) 井伏鱒二「黒い雨」（『新潮』一九六五年一月号、一九六六年九月号。連載開始時は「姪の結婚」という題名で、第八回から「黒い雨」に改題）。引用は新潮社版『黒い雨』（一九六六年十月）より。以下同じ。
- (14) 金子博「戦後の文学・論（その1）―井伏鱒二『黒い雨』―」（『都留文科大・国文学論考』22号、一九八六年三月）。
- (15) 寺横武夫は「『黒い雨』注解」（磯貝英夫編『井伏鱒二研究』溪水社、一九八四年七月）で「連載終結後の、堰を切ったように続けられる自己解説」と表現し、その発言の状況をまとめている。
- (16) 「四季」、一九六九年七月。引用は『井伏鱒二対談集』（新潮社、一九九三年四月）六四頁より。
- (17) 『井伏鱒二自選全集 第六巻』（新潮社、一九八六年三月）四四八頁。
- (18) 東郷克美「『黒い雨』―自然の治癒力あるいは言葉の戦争―」（『国文学解釈と観賞 別冊』一九九六年二月）。
- (19) 石田忠・山本和平「対談 井伏鱒二『黒い雨』を読む」（『橋論叢 第94巻第6号』、一九八五年十二月号）では作品から具体的にいくつか紹介している。たとえば、先行研究でもよく引かれる「戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい。」（11章）という部分など。

井伏鱒二「黒い雨」の位置（内田 友子）

- (20) 黒古・夫『原爆文学論―核時代と想像力―』（彩流社、一九九三年七月）一二頁。
- (21) 第15回新日本文学賞評論部門佳作（『新日本文学』No.356、一九七七年四月号）。
- (22) (20)に同じ。五七―五八頁。
- (23) この作品は井伏氏の持ち味でもあると思いながら、やや小咄的筆致の作品といわれても致し方がない（豊田清史『『黒い雨』と「重松日記」』、三三―三四頁）など。
- (24) 大江健三郎「原爆後の日本人の自己確認」（(10)に同じ。一〇―一一頁）。